

中国残留邦人のいま  
日中国交正常化50年

1面から続く

# 1世の孤立 地域で防ぐ

の友達に会えるのがうれし  
い」と笑顔を見せた。

サロンは2015年、国の  
助成金を活用して始まっ  
た。日本語をあまり話せな  
い帰国者らが地域で孤立し  
ないようにするのが狙い  
で、同法人理事の青木基成  
さん(74)は「楽しく笑い、  
おしゃべりすることが一番  
健康につながる。思う存分  
中国語を話し、ストレスを  
発散してほしい」と願う。

## うつ病を患う人も

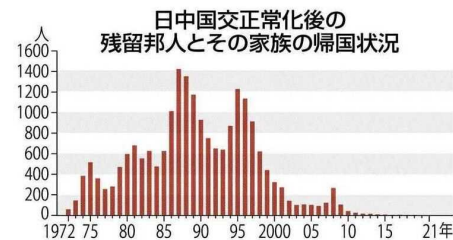
厚生労働省が15年に行っ  
た残留邦人の実態調査で  
は、帰国した残留邦人の約  
3割が日本語を「全くでき  
ない」「片言のあいさつ程  
度しかできない」と答えた。  
同省が民間に委託して運  
営している北海道中国帰国  
者支援・交流センター(札  
幌)は週2回、帰国者向け  
の日本語教室を開いてきた



中国残留邦人 戦前・戦中から旧満州(現中国東  
北地方)に住み、戦後も長期間、中国に取り残され  
た日本人の総称。終戦直前の旧ソ連の侵攻などに伴う混乱  
で多くの日本人が犠牲となる中で家族と離別し、中国人養  
父母に引き取られた幼い子ども(残留孤児)と、生活する  
ために現地の中国人と結婚した女性(残留婦人)が大勢だ。  
国交がない間、日本政府の反共路線を背景に引き揚げは停  
滞した。72年の国交正常化後、民間団体の調査に背中を押  
される形で政府も調査や帰国支援に乗り出した。国交正常  
化後の残留邦人本人(1世)の帰国者は今年7月末時点で  
6724人(家族を含め2万911人)。道内には約8000  
人が定着し、今は74人(同約270人)が暮らす。



介護予防運動サロンで軽いストレッチや交流を楽しむ中国  
残留邦人ら＝8月21日、札幌市厚別区



が、加藤欣也所長は「40  
50代になって帰国した人が  
少なくなく、どんなに勉強  
しても日本語を習得できな  
い人もいる。何年たっても  
社会になじめず、うつ病に  
なった人もいる」と明かす。  
日本語が不自由な帰国者  
の多くは安定した職を得ら  
れず、老後の不安を抱えな  
がら、厳しい生活を強いら  
れてきた。そして高齢にな  
った今、新たに直面してい  
るのが介護や通院に伴う不  
安だ。国も17年、札幌を含  
め全国7カ所の中国帰国者  
支援・交流センターで介護  
施設などに中国語を話せる  
「語りかけボランティア」  
を派遣する事業を始めた。  
「介護は子」根強く  
北海道のセンターでは現  
在、21人がボランティアと  
して登録し、札幌周辺に住  
む70代、80代の3人が利用  
する。ボランティアは派遣  
先の施設の自由時間に帰国  
者とテレビ番組や天気など  
について雑談し、施設職員  
との意思疎通も手伝う。帰  
国者宅に直接ボランティア  
を派遣することもある。  
しかし、「親の介護は子  
がするもの」という意識が  
いまだに根強い中国で育っ  
た帰国者の中には、介護サ  
ービスやボランティア受け  
入れを遠慮する人も少なく  
ないという。ボランティア  
の利用者は5年間で8人に  
とどまる。センターの加藤  
所長は「自宅などで孤独を  
深めている人は想定するよ  
りも多いはず。センターに  
顔を出さなくなった帰国者  
にもできる範囲で声かけし  
なければいけない」と課題  
を挙げる。  
「今の生活は中国にいる  
時よりありがたく、また中  
国で暮らしたいとは思わな  
いが、家で一人きりの時間  
が多く、とてもつまらな  
い」。元残留孤児で、札幌  
市厚別区の市営住宅で1人  
暮らしの中沢槇子さん(80)  
はこうつぶやく。心の豊か  
さを取り戻してもらう方策  
がこれまで以上に求められ  
ている。